ASCA Bulletin

2013 vol. 2

アスカコーポレーション広報誌　ASCA ブレティン

〈特集〉メディカル翻訳座談会

トーンを感じる翻訳力

クライアントが満足する一流の翻訳とは

・ASCAサービス紹介：論文投稿サポート

・翻訳ヒヤリハット事例集

・サイエンス誌最新情報：神経膠腫発生と脱分化

株式会社 アスカコーポレーション

特集：メディカル翻訳座談会

トーンを感じる翻訳力

クライアントが満足する一流の翻訳とは

臨床試験がグローバル規模で行われ、申請までの期間をいかに短縮するかが求められる製薬業界において、医薬翻訳会社もまた、対象となる翻訳文書をスピーディーかつミスなく仕上げることが必須となっています。
今回のテーマである「トーンを感じる翻訳力」とは、まさにスピーディーかつクライアントの心に響く翻訳のこと。心に響く翻訳を仕上げるために必要なこととは何か、発注側である外資系製薬会社の社内翻訳者兼翻訳発注担当グループマネージャーである加瀬淑子氏と、翻訳者を代表してアスカコーポレーション スター翻訳者の渡辺典子氏に語っていただきます。

パネリスト：**加瀬 淑子** 氏
グラクソ・スミスクライン株式会社
開発本部 薬事部門 薬事推進部 翻訳グループ マネージャー

渡辺 典子 氏
アスカコーポレーション シニア翻訳者

石岡 映子
アスカコーポレーション 代表取締役

モデレータ：**西田 沙織**
アスカコーポレーション 営業部

加瀬 淑子 氏

渡辺 典子 氏

参考資料からトーンを読み取る

西田：加瀬様のグループから受注をいただくときには、いつも指示が適切という印象があります。発注する際に心がけていることはおありですか?

加瀬：参考資料を用意することです。私は翻訳発注の担当として、社内の取りまとめを行っていますが、必ず依頼者に資料を用意するよう働きかけています。
参考資料がなければ、環境もバックグラウンドも異なるわけですから、こちらが望む仕上がりになるはずはないということを依頼者には説明しています。資料が用意できない場合、あとで仕上がりへの不満を言わないというのが社内ルールです。最近は、ガイドラインや特定のウェブサイトを参考資料として提供することも多く、検索するウェブサイトまで指定することもあります。

渡辺：参考資料は、たとえ日英のどちらかだけであっても、ご提供いただけるのはありがたいことです。ただ参考資料が複数あって、用語について複数の表現がある場合はどれを選択すればいいのか悩む場合があります。また、元となる原稿の英語、日本語に違和感があって、これを採用してよいのかというジレンマに遭遇することもあります。

加瀬：私どもの立場を言うと、提供したものは承認されたものなので、どんなにひどくても変更できない場合があるということをご理解いただければと思います。翻訳者には、あえてその表現を割り切って使っていただくようお願いしています。資料間の相違については、ご指摘をいただけるとありがたいです。

石岡：参考資料をどう使うかというところに、翻訳者の腕の差がはっきり出るという印象があります。

加瀬：参考資料を渡すことで、翻訳者を苦しめることは本意ではありませんから、できるだけこの辺を見てほしいということを指定してお伝えするようにしています。
しかし、その指示がない場合でも、与えられた資料全部を読むというのは、参考資料の使い方をわかっていないということになります。治験薬概要書（CIB）が提供された場合に、文書内のどこに何が書かれているかというのは、医薬翻訳者であれば大体わかっていないといけないと思います。
私の場合、社内で急ぎの翻訳をしますので参考資料を使うにも非常に短時間で見なければいけません。ですので、翻訳しながらkey termを取り置き、あとで参考資料を見て一度に直します。参考資料は参考にするというよりも、求めている単語や表現を探しに行くという感覚です。

渡辺：私も全部を見るということはありません。おっしゃるように求める言葉を検索するのがメインの使い方です。やはりプロトコールとか同意説明書とか、そういうものを一通り経験しておけば、すべてを見るまでもなく、これはどういうポイントで見ればいいのかがわかってきます。

加瀬：依頼者側から言うと、まずCIBありきです。すでに承認されたCIBは直せませんし、絶対的な表現になります。また、臨床試験に関してはプロトコールがすべてです。

渡辺：これから本格的に翻訳をなさる方も、まずCIBとプロト

コールを理解するということをやっていただければ、経験は積んでいけますね。

加瀬：私が参考資料を渡すことにこだわっているのは、「トーンを感じる」翻訳をしていただきたいと考えているからです。このトーンを感じる力というのは、実物を見ないと絶対に芽生えません。本物のCIB、本物のプロトコールを見て、そのトーンを感じる力を養っていただきたいと思います。私どもの方でも、開発中の薬剤では直接の資料を出せないことも多くあります。それでも何とかトーンをつかんでほしいと思って依頼者と資料を探していますので、翻訳者の方でもその意を汲んで翻訳に取り組んでいただけると嬉しいです。

翻訳者からの質問事項

渡辺：先ほど資料について翻訳者から意見を述べてもいいというお話しがありましたが、このTranslator's Noteについては、どのように処理されているのですか?

加瀬：Translator's Noteは実際に翻訳者に記入してもらっていて、その内容は依頼者に申し送りしています。複数ある参考資料間の矛盾点については、必ずご指摘をお願いしています。
依頼者からは、「ありがとうございます、助かります」という感謝の声が非常に多いです。場合によっては「それはわかっているんだけど変えられない」ということもありますが、次回にご提案を勘案することができますので、納品するときに「ここはこの方がよい」というのを指摘していただけるとありがたいです。また、納品されたときにそこをまずつぶしていくので、私たちのチェックにもメリハリがつけられます。

渡辺：コメントを入れることであとの作業が効率化されるということですね。

西田：しかし、質問をするというのも難しい部分があります。質問事項を見ると、翻訳のレベルが一目でわかってしまうところがありますので。

加瀬：確かに、質問を見ればこの人わかっていないな、ということがわかります。そこは翻訳会社の方で気をつけて、それを見極めて質問をするということになります。ですので、そこにはコーディネーターの力量が関わってきます。
例えば「この訳をご確認ください、解釈をご確認ください」とばかり書いてある。それを見ると、依頼者は「確認事項ばっかりで、これでは頼んでいる意味がない」という気持ちになってしまいます。そこはやはりうまい聞き方がありますので、クライアントに合わせてうまく研究していただきたいと思います。
どうしたらいいですかと聞くのではなく、確証は持てないけれど3つぐらいは案を考えておいて、選んでもらうようにするなど。

渡辺：私は、翻訳としては自分なりの完成品を出すことを心がけています。
確認事項ばかりで納品するのは、ずるいと思っています。プロである以上は、これが自分のやりきった完成品ですという形で出すべきです。

石岡：あとは翻訳会社にお任せではなく、プロである以上はまずは自分で答えを見つける。これは基本的なことだと思うので、まずは自分で答えを出した上で、プロであれば相手にもう一度確認をお願いしたいという姿勢が大事ですね。
ここはやったけど、ここはできなかったということをきちっと説明すべきでしょう。

プロ意識について

西田：いま「プロ」という言葉が出てきましたが、渡辺さんは翻訳者のプロ意識についてどのようにお考えですか?

渡辺：プロ意識が低いと、これからは対応できないでしょう。まずは、常にクライアントを意識した仕事ということになると思います。最初の指示事項を必ず守る。わからないことがあれば、すぐ連絡をして答えをもらう。

石岡：翻訳会社、PMたちによる意識づけが重要で、翻訳会社と翻訳者とクライアントの3つがきっちり関わっていかないといい仕事はできないとは思います。

加瀬：翻訳会社のコーディネーターの力量というのは非常に大きな影響があると思っています。
単に仕事を受けるマシンじゃなくて、自分が手がけた案件が薬の審査段階の1つを動かしているとか、それによって何万人の患者さんが助かっているとか、そういうことを意識していただくとよいのではと思います。
弊社のスローガンは「患者さん第一」で、どのような業務にも究極的には患者さんを救うためという素敵な目標があります。ですから在宅で作業をする翻訳者さんであっても、一生懸命急いでやった作業によって、難病の方が1日早く救われるんだということをイメージしながらやるとやらないのでは、モチベーションが違うのではないでしょうか。

渡辺：翻訳は単なる個人の作業ではなく、開発過程の中の欠くことのできないプロセスであって、その先には人の生命や生活が関わっているという意識を持てば、おのずと取り組み方が変わってくるでしょう。

加瀬：また、私が社内で常に心がけているのは、翻訳業は専門職である前にサービス業であるということです。どれだけ高いスキルを持っていても、社内の依頼者が喜ぶような仕事をしなければ意味がありません。
薬剤の知識については、翻訳者よりも、最先端を知っている企業の担当者の方が詳しいのは当然です。そういう人たちを相手にしなければならないのは大変なことですが、鍵になるのがサービス業としての意識ではないかと思います。

渡辺：翻訳者はアカデミックな職人だと思っているのですが、職人としての意識とサービス業としての意識を併せ持つということですね。

石岡：本当の職人さんはお客さんをとても意識しています。

渡辺：結局プロというのは自己満足ではなくて、相手がどう思ってくれるかということですね。
具体的な作業の話になりますが、一括置換というプロセスの重要性を再認識しています。先日、翻訳祭に行き、いくつかのセッションに参加しました。そこで言われていたことは、とにかく用語、

表現を統一してほしいということでした。翻訳のときに置換で統一しておけば、あとになってクライアントが一括置換で直すことができる。徹底しておけば、ただ単に自分の効率を上げるだけではなく、正確だし、あとの作業でそれを編集される方が楽になります。内容を正確に把握することも重要ですが、あとの作業を意識して翻訳することがより望まれる。それが結局、職人の責任ということですね。

加瀬：その意識を持ち続けることによって自分の実力も上がるし、クライアントからも多くの指名が来ると思います。

渡辺：責任とあとはプライドですね。訳してもらったお陰でやっと投稿できたとか、今まで適応外の医薬品だったけれども、訳したことがきっかけで適応外使用への道が拓けたというフィードバックをもらったことがありますが、そういう声を聞くと人様の役に立っているんだなというのはあります。そういう意識なしには仕事は続けられないかもしれませんね。

医薬翻訳者に期待されること

西田：最後に、今後医薬翻訳者として活躍したいと考えている読者のために、メッセージをいただけますでしょうか。

渡辺：翻訳の依頼をいただいた時点でその薬について知らないのはベテランでも駆け出しの人でも変わりません。内容理解もあまり苦しいことと思わないで、興味を持って楽しんでやればいいと思います。

石岡：いったん家庭に入ってしまっている人に、どうやって知識を身につけてもらうかが課題だと考えています。社内では勉強会や、新聞記事でのディスカッションという取り組みはしているのですが。

渡辺：医学は生活レベルのことからでも興味が持てますし、必ずしも家にいるから難しいとは私は思いません。

加瀬：現在はインターネットで製薬会社や当局の情報も入手できますし、医療関係の情報は大量に流れています。数社の製薬企業のホームページのプレス・リリースを毎日１カ月間続けて読み続ければ、かなりの知識が身につくのでは。疾患や、用語について丁寧に解説しているサイトも多数あります。それができないとしたら、モチベーションの問題ではないでしょうか。確かに興味が湧かなければ苦痛でしょう。

渡辺：何となく在宅でちょっと英語を使って仕事ができたら、みたいな感覚では、クライアントのニーズに応えられるような翻訳はできません。今からやる人は、メディカルの翻訳を通じて臨床開発に関わるという心意気を持っていただくしかないと思います。

加瀬：今後、国際共同試験が増え、国内の審査体制がスピードアップすると、翻訳はより早く、より大量にということが見通せますので、今のままでさばき切れるか気が重いほどです。
翻訳者の方には、やはりスピードを上げる、例えば、参考資料の用語を使って、一晩で３～４枚はできる、そういう力を身につけておけば引く手あまたになるのではないでしょうか。

渡辺：この不況で仕事がない時代に、すごく需要はあるわけですね。和訳（英日）だけではなく、バランスをとって英訳（日英）にも取り組んだ方がいいと思います。英語というのは論理的に考えるということができるかどうかなので、決して難しいものではありません。

加瀬：私どもとしては、急ぎの対応は当局関連の英訳なので、英訳ができる方はこれからますます必要になります。
こういう私たちのニーズと背景を、翻訳会社から翻訳者にぜひライブで伝えていただきたいですね。
もうひとつ言うと、翻訳者さんは、単体の仕事を依頼されてやっているという形になりますが、依頼者側では、この依頼の前後にさまざまな業務を行っています。結局、やっているのがその場限りの仕事ではなく、一連の流れにつながっていくということをまず理解していただきたい。そうすればトーンを合わせることの意義もよく理解していただけると思うのです。
極端な話をいうと、ぶっきらぼうだけれども内容が忠実な翻訳と、うまいけれども意訳し過ぎという翻訳だったら、ぶっきらぼうだけれども忠実の方を絶対にクライアントは要求します。チェックと修正がしやすいからです。

渡辺：私は翻訳者というのは「触媒」だと思っています。決して自分が反応自体に加わってはいけないと考えています。そして理想としているのは、そこに書かれてあることを、コンセプトをそのままに決して足し引きせず、言語を置き換えるということです。単語レベルではなく、言外の意味まで捉えて、まるで始めからその言語であったかのような表現をしたいと考えているからです。
そのためには、何より必要なのが経験、しかも幅広い経験が物を言います。これからの翻訳者を育てるという意味では仕事の割り振り方も大切ですね。やる気のある人を伸ばしてほしい。

加瀬：やる気を出させるのも、正しい方向にやる気を導くのも翻訳会社の役目であり、期待のかかるところです。
いろいろ言ってきましたが、やはり社内にいる普通の人から見て、プロの外注翻訳者というのはすごいなあという声は常にあるんです。私どももちゃんと尊敬の念を持って見ていますので、それに応えるように若い人には取り組んでいただきたいと思います。

石岡：最後は翻訳会社に対する期待の声もいただきましたが、私たちもやる気のある次の世代の人たちとともに歩んでいけるような会社でありたいと思っています。本日はありがとうございました。

ASCAサービス紹介
論文投稿サポート

目指すのは論文投稿～海外広報のワンストップソリューション

英語論文を投稿しなければならなくなった、でも、じっくり英語で書くまとまった時間が取れない、英語で書いたが英語でネイティブに通じるか不安がある、論旨展開が適切かどうか第三者にレビューしてもらいたい、投稿規程に合わせてほしい、書いた論文の英語に自信はあるがネイティブスピーカーにチェックしてもらうよう言われた、とりあえずアブストラクトだけでも英語にしてほしい、アクセプトされた論文を広く多くの人たちにPRしたい、などなど、投稿論文にまつわるさまざまな状況があり、多様なリクエストがあります。
そうした状況を個別にお手伝いするのがASCAの論文投稿支援サービスです。

論文作成～投稿まで、
先生のお時間を最小化するお手伝いをさせていただきます。

ASCAのミッションは、「翻訳、校正などの言語サービスを通じて、医学を中心とした科学の発展に貢献する」ことです。さまざまなトップジャーナルの翻訳の経験を活かし、貴重な先生方の論文の、作成から投稿までの全プロセスをサポートさせていただくのが私たちの使命のひとつです。
限られた時間の中で、ライフサイエンスに精通した専門エディターたちが責任を持って取り組みます。

アクセプトされた貴重な論文の海外 PR をお手伝いさせていただきます。

長い時間をかけてようやく書き上げた論文がアクセプトされるのは本当に嬉しいものです。苦労が報われる瞬間でしょう。しかし、掲載されたジャーナルを手にして満足いただくところでASCAのサービスは終わりません。せっかくアクセプトされた質の高い論文をより多くの人に読んでもらう工夫が必要です。国内メディアだけでなく海外のメディアにもプレスリリースすることで、専門家以外の人たちにも研究内容が伝わります。こうしたプレスリリース配信や英語ウェブサイトの作成・レビューなどのサービスを通じて、ASCAは研究のpublishing活動に貢献いたします。研究者だけでなく民間企業などにも伝えるには大きな効果が見込める手法です。

日本が科学研究の分野で強い存在感を持つ国であり続けられるよう、私たちは高度な専門性と、きめ細かなサービスで医師・研究者の皆様をサポートしたいと考えています。

アスカコーポレーション 営業部
論文投稿支援サービス担当　早川 威士

翻訳ヒヤリハット事例集

ASCAの翻訳QC担当者が日々の業務中に出くわした、
思わずヒヤリとした事例と、その対処法をご紹介します。

■第2回　誤変換の問題

翻訳に限った話ではないかもしれません。機械を使って日本語の文章を書く以上、漢字の誤変換は避けがたくつきまとう問題です。自分では気をつけたつもりなのに、(送信・印刷済みの) 文章を読み直してがっかり、という経験をどなたもお持ちではないかと思います。

このがっかりを避けるには?　例えば、作成後の文章をざっと見直すことを心がけるだけで、かなりのミスを拾うことができそうです。よく注意して読めば「おや?」と心にひっかかるものがほとんどでしょうから。

ところが、医薬翻訳の世界には、もう少し厄介な誤変換のタネが存在します。主にこの分野でのみ使われ、しかも似たような同音語との区別がつきにくい専門の術語です。

例えば「**奏効**」「**忍容**」「**曝露**」「(同音ではありませんが) **増悪**」などがこれにあたるでしょう。

こうした専門用語の誤変換は、気づくのが難しいだけでなく、お客様に一般的な誤字よりも強い不信感を与えるおそれがあります。「この分野のことをよく知らない者が訳したのではないか?」と。

恥ずかしながら弊社でも、お客様から注意をいただいたことがあります。例えば「**母胎**」が「**母体**」に、「**人工甘味料**」が「**人口甘味料**」になっているのを見落としていました。

この頭の痛いミスを防ぐために、ASCAでは誤変換チェック用のWordマクロを作成し、毎日の業務で使用しています。マクロには上記の例をはじめとする同音異義語のリストが組み込んであり、文中の疑わしい語句をピックアップします。この種のリストに完全ということはあり得ませんが、今後も少しずつ内容を充実させ、より使い勝手の良いものにしてゆければと考えています。

■翻訳者の皆様へ

要注意語のリストを独自に作ってみてはいかがでしょうか。医薬分野に限れば、主要なものはそれほど数が多いわけではなさそうです。

またASCAでは、登録いただいた翻訳者の方にASCApediaという情報共有ウェブサイトをご案内しています。

このサイトにも「**間違いやすい医学用語**」リスト(表を参照)を掲載していますので、参考にしてください。

誤変換には社内のQCチームも注意を払っていますが、翻訳者の皆様にもあらかじめ気をつけていただくことで、さらに確実にミスを防ぎ、よりよい訳文をお客様にお届けできるだろうと思います。

ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

表「間違いやすい医学用語」の例

誤	正
奏功	奏効
憎悪	増悪
容量	用量
認容	忍容
暴露	曝露
偏頭痛	片頭痛
知見	治験
疑陽性	偽陽性(擬陽性)
看護士	看護師
基質的、気質的	器質的
兆候	徴候
野性	野生
繊維	線維

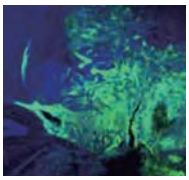
科学誌 *Science* 最新情報

癌遺伝子活性化によるニューロンとアストロサイトの脱分化はマウスにおいて神経膠腫発生を誘導する

Dedifferentiation of Neurons and Astrocytes by Oncogenes Can Induce Gliomas in Mice

Dinorah Friedmann-Morvinski[1], Eric A. Bushong[2], Eugene Ke[1,3], Yasushi Soda[1], Tomotoshi Marumoto[1,4], Oded Singer[1], Mark H. Ellisman[2], Inder M. Verma[1],*

1 Laboratory of Genetics, The Salk Institute for Biological Studies, La Jolla, CA 92037, USA.
2 Center for Research in Biological Systems, National Center for Microscopy and Imaging Research, University of California San Diego, La Jolla, CA 92093, USA.
3 Graduate Program in Bioinformatics, University of California San Diego, La Jolla, CA 92093, USA.
4 Division of Molecular and Clinical Genetics, Department of Molecular Genetics, Medical Institute of Bioregulation, Kyushu University, Higashi-ku, Fukuoka 812-8582, Japan.

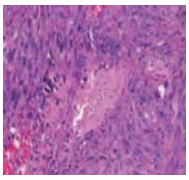


マウス脳腫瘍モデル：緑の部分が腫瘍細胞

Abstract

多形性膠芽腫（GBM）は、成人に発生する脳腫瘍のなかでも頻度が高く、かつ最も悪性の腫瘍である。その治療法開発にはGBMの発生機構を理解することが必要不可欠であるが、その細胞起源に関しては、長らく不明であった。本研究では、細胞種特異的かつ領域特異的に発癌を誘導することのできるレンチウイルスベクターシステムを用いた脳腫瘍マウスモデルが用いられ、GBMが未分化神経前駆細胞だけでなく、皮質ニューロンやアストロサイトといった終末分化細胞にも由来し得ることが示された。分化したニューロンやアストロサイトで発癌が誘導された場合、脳内の領域にかかわらず、それらから生じる腫瘍は未分化細胞マーカーを発現した。マイクロアレイ解析により、これらの終末分化細胞由来腫瘍は、間葉系GBMのサブタイプと同様の遺伝子発現様式を示すことがわかった。これらの結果から、中枢神経系終末分化細胞で発癌イベントが生じると、それらの細胞は脱分化することにより、未分化細胞のもつ自己複製能や多分化能を獲得し、GBMを構成する多様な細胞集団を形成するとともに、その悪性形質を示している可能性が示唆された。

Author
九州大学 生体防御医学研究所
ゲノム病態学分野 講師
丸本 朋稔 先生



マウス脳腫瘍モデルのH-E染色標本

Message from the Author

本研究により多形性膠芽腫をはじめとする神経膠腫（グリオーマ）においては、終末分化したニューロンあるいはアストロサイトが発癌刺激により脱分化し、未分化細胞のもつ機能を獲得することが、腫瘍が悪性形質を示す原因となっている可能性が示唆されました。今後はこの癌化誘導リプログラミング機構の分子レベルでの解明が望まれます。

編集部より

iPS細胞技術などでもキーとなる脱分化のプロセスが、生体内で脳の細胞の癌化に関与している可能性を示した研究です。この研究から、将来的にGBMを含む癌の治療法の開発や再生医療の発展につながることを期待して、ここにご紹介させていただきました。

■ サイエンス日本語版ホームページ

サイエンス日本語版ホームページがリニューアルされ、さらに使いやすいデザインとなりました。*Science* 等に掲載された最新の研究論文へ簡単にアクセスできます。メールマガジンの登録もこちらから！ www.sciencemag.jp

ASCAは、*Science* を発行する米国科学振興協会（AAAS）からの委託を受け、Science Japan Customer Service Officeとしてカスタマーサービスを担当しています。

ASCA Bulletin

アスカコーポレーション広報誌　ASCA ブレティン

■ 発行
株式会社アスカコーポレーション
・大阪本社
〒541-0046 大阪市中央区平野町1-8-13 平野町八千代ビル6F
TEL：06-6202-6272　FAX：06-6202-6271
・東京事務所
〒108-0014 東京都港区芝4-13-8 ケイエフビル9F
TEL：03-6459-4174　FAX：03-6459-4175
http://www.asca-co.com/

■ 制作・編集
株式会社アスカコーポレーション
ASCA Bulletin委員会
・石岡 映子
・伊藤 聡子
・駒田 大輔
・佐藤 直人
・西田 沙織
・早川 威士

■ デザイン
山本 千恵

■ 写真
邑口 京一郎

■ 印刷
有限会社 新明印刷

■ 協力
九州大学
American Association for the Advancement of Science

■ 発行日
2013年1月

■ 表紙：モクレンの花

モクレン（木蓮、Magnolia）は中国を原産とする落葉低木で、1億年以上前から存在する地球最古の植物のひとつ。今回の表紙を飾る濃紫色のものはシモクレン（紫木蓮）、白色のものはハクモクレン（白木蓮）と呼ばれています。
モクレンの花言葉は「自然への愛、持続性」他。また、モクレンのつぼみは全て北の方角を向く指向性があります。本年、ASCAの皆が目標に向かって持続可能な会社にしたい、そんな決意を新たにする思いで2013年最初のASCA Bulletinの表紙イメージに採用しました。
© sethertonb via flickr

© 2013, ASCA Corporation, All Rights Reserved.
本誌掲載記事の無断転載を禁じます。
本誌掲載記事内容のお問い合わせや乱丁・落丁本のお取り替えは株式会社アスカコーポレーションまでお申し出ください（06-6202-6272）